

それ故に昭和七年春から夏にかけて反資本主義的愛國運動は、正に最高潮に達したものである。しかるに早くも七年末頃乃至八年の始めから次第に衰退し初めた。

それにも幾つかの原因があるが、その最も重むるものは為替低落によつて日本商品の海外進出を強め、先づ飢饉、雜貨業の好況となり、外品輸入を阻止することによつて國內産業を振興し、所謂為替景氣を現出したことである。更にソレにも増して有力であつたのは軍需品インフレ景氣である。

これが打續く不況と、その深刻化のため、絶望的氣分に閉ざれてゐた人達を、まあまあと一應解放したことである。

今一つは最初反資本主義的の皇道主義に徹底すると傳へられた軍部の妥協的甘柔である。しかも時を經るに従つて財閥の壓迫を受け、遂に滿鉄改組案をめぐつて、軍部對村務大藏（現制度を代表する）の對立抗争には財閥が滿鉄社債賣行不承をとつて酬ひた。

それでも断乎たる決心とすることの出来ぬ軍部は、最早滿洲事變當時の期待をかけたのではないのが當然であり、かくて反資本主義的愛國運動は、次第に下火になつて行つたのである。

しかしながらこれによつて、一切が解消してしまつたのではなく、寧ろ原因は根深く横がりつゝあるのである。唯、餘りにも期待すべからざるものに期待し過ぎ、またこの世界的不況期に、とと角日本は為替関係と、軍需インフレと、安き労働費銀と、労働強化によつて、あるブルジョア新聞をして「他國はいざ知らず、日本はコレから資本主義の繁榮期に入るのだ」とほざかすに至つてゐるのである。

五 日本の經濟と労働階級

かくの如く日本は、とと角インフレ景氣にめぐまれてゐるのである。こゝで一々数字をあげないが、今まで指すものどとせかつたボロ株の相場がハネ上り、新設計畫が次から次と北浜の市場に現はれるのを見て、資本家にとつて正にインフレの春である。

しかし乍ら果して労働者はドウであるか？（二年前、失業と減給と強化の嵐が吹き捲つた時よりはいくらか生色あるとしても、果して労働者にインフレの春が訪れてゐ